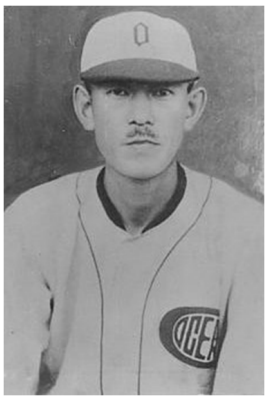
野球を愛し、野球に愛された北の球聖

久慈次郎

一八九八年に青森県青森市で生まれた久慈次郎は、岩手県盛岡市で四人兄弟の次男として育ちました。幼い頃は絵を描くことが好きで、画家を目指していました。


〔盛岡市先人記念館蔵〕

久慈が生まれた頃には、全国で野球が盛んになり、少年たちの間に野球熱が高まり始めると、久慈も当然のように野球に没頭していきました。

十三歳になった久慈は、野球の名門だった盛岡中学校*を受験しますが、失敗してしまいます。それでも「ここで野球がしたい」と強く思った久慈は、一年待って再度、受験し、入学を果たしました。

当時から身長が非常に高く、面倒見のよかった久慈は、いつもリーダー的存在であり、先生や友人の誰もが一目置く存在でした。そんな久慈に与えられたポジションは、野球では「守備の要」と言われるキャッチャー（捕手）でした。常に冷静な判断力と強い統率力が必要とされるキャッチャーは、久慈にうってつけのポジションでした。

選手として頭角を現した久慈は、「名捕手久慈あり」と評判になり、中学校卒業後は、早稲田大学に進学し、強豪であった野球部に入部しました。

大学でも素晴らしいプレーを見せた久慈は、アメリカ遠征に参加し、そこで本場の野球に触れることにより、一層技術に磨きをかけました。久慈の活躍で、早稲田大学野球部は黄金時代を迎えることとなります。

一九二二年、久慈は二十四歳で大学を卒業しましたが、日本にはまだプロ野球チームはありませんでした。そこで、熱烈な誘いを受けた社会人野球チームである函館オーシャンに加入することを決め、第二の故郷となる函館に移りました。

名捕手久慈の函館オーシャンへの入団は、函館の人々の心を湧き上がらせました。

函館オーシャンに入団してほどなく、久慈は主将に就任します。新入団選手である久慈が主将になることなど、通常では考えられないことですが、野球の技術、野球への姿勢、そして、どんなに名声が高くなってもおごることなく、常に謙虚な姿勢を保ち続ける人柄から、チームメートに

推薦されての就任でした。
その年の夏、函館オーシャンは社会人野球で当時、日本一の実力を誇っていた大阪の強豪チームと対戦することとなりました。
久慈は、主将として初めての大舞台に「勝つことは難しくても、せめて接戦に…。」との思いで試合に臨みましたが、なんと函館オーシャンが勝利したのです。この歴史的な勝利は、野球ファンの誰しもを驚かせ、北海道の一野球チームにすぎなかった函館オーシャンを、たちまち全国区のチームへと押し上げたのです。その後、久慈は、選手のまま函館オーシャンの監督に就任しました。
北海道では無敵を誇っていたチームでしたが、毎年行われる*「全国都市対抗野球大会」では、一回戦での敗退が続きました。しまいには観客から「イチコロ・チーム」というあだ名をつけられてしまうほどでした。それでも、函館オーシャンの決してあきらめない野球は見るものの心を動かし、先頭に立ってチームを率いる久慈の人気には目を見張るものがありました。
毎年、久慈が大会のグラウンドに姿を見せると、
「どうだ、若い者は上手になったか？」
「今年こそ頑張れ！」
というかけ声が両軍のスタンドから聞こえてくるのです。それは、久慈の人柄をよく知るたくさんの観客からの応援の言葉でした。
一九三一年、アメリカ大リーグ選抜チームが来日し、日米野球が行われることになり、その時に結成された全日本チームの主将として、久慈が選出されました。久慈は全日本チーム選出のために行われたファン投票で二位以下に大差をつけての一位だったのです。
久慈率いる全日本チームは、ベーブ・ルースなど伝説的なスターのいるアメリカ大リーグ選抜チームと戦いました。久慈主将の下で、今も名選手として語り継がれる沢村栄治やスタルヒンなどの選手たちが全力を尽くしてひたむきにプレーする姿は、多くの国民に勇気や希望を与えました。
一九三四年にアメリカ大リーグ選抜チームとの日米野球が再び行われることになりました。しかし、この年の三月二十一日、函館の街は大火に見舞われ、市街の大半が焼き尽くされ、復興のめどさえつかない状況に陥りました。
函館オーシャンの選手たちも、大半が火事で焼け出され、自分たちの暮らしを立て直すことに忙しく、野球どころではありませんでした。

大火から七ヶ月後、大リーグ選抜チームとの日米野球は、「野球が函館を救ってくれる。」という久慈の熱意により函館で開催され、懸命にプレーする久慈の姿は被災に沈んでいた函館の人々に復興への勇気と希望を与えました。

日米野球の後、東京では全日本チームのメンバーを中心とした日本初の本格的なプロ野球チーム「大日本東京野球倶楽部」（現在の東京読売巨人軍）が誕生しました。

全日本チームの主将として活躍した久慈には、主将として、他の選手の五倍の給料で参加が要請され、チームには、アメリカ遠征も予定されていました。

憧れのプロからの招きに、「アメリカに行き、もっと野球がうまくなりたい。そして、新しくできるプロ野球チームで主将として仲間の期待に応えたい。」と久慈の心は揺れました。

しかし、久慈は考え抜いた末に、「チームの選手や函館の街を置き去りにして函館を離れることはできない。自分が中心となって、函館の町を復興させなければ…。」と強い思いで、この申し出を断りました。

久慈のこうした思いを聞いた大日本東京野球倶楽部は、選手として招くことは断念しましたが、初代主将として、記録にだけは久慈次郎の名を刻むことにしました。

一九三六年、久慈は函館復興への思いを胸に、球場建設のために函館市議会選挙に立候補しました。久慈の統率力や責任感は函館市民に知られていたので、予想以上の票を集めて当選しました。そして、久慈の尽力により、新球場の再建が決定しました。

こうした努力もあり、大火から五年目の一九三九年、函館オーシャンは「第十三回全国都市対抗野球大会」において、ついに悲願の一勝を得ました。この一勝に函館市民は歓喜します。足の怪我をおして気迫あるプレーをした久慈には、「ファインプレー賞」が贈られ、久慈の活躍は、復興に向かう函館市民に大きな希望を与えるものとなったのです。

ところがその年の八月、悲劇が久慈を襲います。札幌円山球場で行われた大会での札幌倶楽部との試合で、リードを許していた函館オーシャンは、七回表にチャンスをつかみます。

ここで久慈が打席に入ると、会場の空気と久慈の迫力に押された相手チームは、敬遠をしました。

フォアボールとなり、一塁へ歩き出そうとした久慈は、次の打者への指示を出そうと歩みを止め、一度振り返りました。久慈は選手であり、監督でもあったからです。

その時、飛び出していた二塁走者をアウトにしようとしたキャッチャーの送球が、久慈の頭部を直撃しました。直ちに病院に搬送されましたが、二日後、息を引き取りました。

久慈の突然の死は全国に報じられました。函館の街は悲しみに包まれ、葬儀には全国から参列者が訪れ、葬列の沿道は、別れを惜しむ多くの市民で埋め尽くされました。

後に、生涯を野球に捧げた久慈を讃え、都市対抗野大会には、優秀な選手に贈られる「久慈賞」が設けられました。

函館市にある千代台公園野球場（通称オーシャンスタジアム）の横には、偉大な野球人（球聖）として、キャッチャーミットをかまえた久慈の銅像が建てられています。

「千代台公園野球場に建つ銅像」
〔写真提供：函館市公式観光サイト「はこぶら」〕

久慈次郎は今もなお、自分の愛した北海道と函館の野球人を見つめ続けているのです。

一八九八	青森県青森市で生まれる
一九一七	盛岡中学卒業後、早稲田大学野球部に進学する（十八歳）
一九二二	大学卒業後、函館オーシャンに入団、主将に就任する（三十四歳）
一九三一	全日本軍チームの主将として、アメリカ大リーグ選抜チームと戦う（三十三歳）
一九三四	函館大火 大日本東京野球倶楽部への主将としての参加要請を断る（三十六歳）
一九三六	函館市議会議員選挙に立候補し当選する（三十八歳）
一九三九	函館オーシャン「全国都市対抗野球大会」で悲願の一勝をあげる 八月、札幌円山球場で、送球を頭部に受け死去する（四十歳）

＊盛岡中学校…現在の岩手県立盛岡第一高等学校
＊全国都市対抗野球大会…一九二七年から行われている社会人野球の全国大会